美しいまちづくりのために

四十万市民が監視の目を！

美化運動は身近なところから

市内各所に不法投棄されるゴミは、ほとんどが事業所から出されるもの。事業所の自覚を期待するところ大でありますが、なんといっても、四十万市民が〝まちの美化〟に対する意識をより一層強く持つことが必要でしょう。

環境破壊―それは、木をむやみにきり倒したり、黒煙をまき散らしたりすることだけではありません。私たちのまちを、不法投棄によって汚すことも、最も身近な環境破壊の一つといえましょう。

礎町の老人が作っている「礎長寿会」（会長鹿野愈氏）では、定期的に礎公園を清掃し、「ぐみの会」（会長花田嘉代子氏）では、海岸の清掃をするなど、市内の各種団体による〝まちを美しくする運動〟は実際に行なわれています。

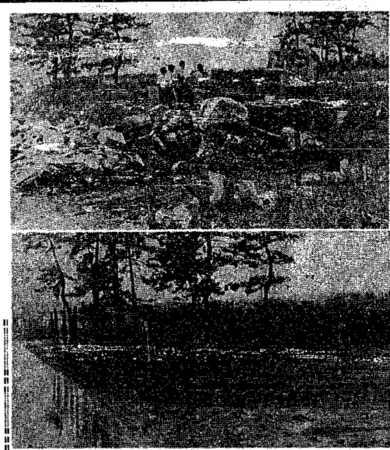
しかし、道路に、公園に、河川に、そして空地という空地に、ゴミは絶えることがありません。その理由の一つは、私たちの生活そのものの中に、〝いずれはゴミになる物質〟があまりにも多いことでしょう。包装紙、ビニール袋…。しかし本来、ごみが多いことと、あたりかまわず捨てる、こととは別のものです。「歩きながらタバコを吸わない」という、ほんのちょっとした認識が、一人ひとりに徹底すれば、おのずと解決する問題です。

市も、町内会、婦人団体、小中学校のP・T・Aなど、各種団体の中にはいり、話し合いを通じて一大市民運動への盛り上がりを図っていきます。

人が捨てるからオレも…

このように、四十万市民一人ひとりの監視の目が行き届けば「不法投棄出来ない」というムードが生まれてくるでしょう。「人が捨てるからオレも…」などという安易な考え方もなくなるでしょう。

一方事業所に対しては、産業廃棄物をはじめとするゴミの処理形態を自主的に市へ申告してもらい処理内容を点検して、適当な事業所に対しては、その旨のステッカーを交付するなど、事業所間の意識交揚のために、〝ステッカー運動〟を促進していく方針です。



県道新潟一間瀬線ぞいに捨てられた不法投棄物の山。きたないばかりか，ほおっておくと量はふえる一方。そこで土地所有者と協議のうえさっそく整理し，もとのきれいな空き地にもどしました。

私は思う

徳永京子さん（主婦 文京町14）

子どもの手本に

ゴミの始末は自分で

不法投棄は他人の迷惑を無視した悪質な行為だと思います。

日本人には公衆道徳心が欠けているのか，他人はおかまいなしと，いった状況が目につきます。松林やあき地にゴミを投げ捨てる，そしていつの間にかごみの山ができてしまう。

海開きの日に，海洋少年団をはじめ関係者の人たちが，小石や危ないものを拾い集めたというニュースを見ました。

それがどうでしょう，日曜日ごとに海辺には食べ残したスイカやあきビン，茶わんのかけらなどがあたり一面散乱し，ゴミをかき分けながら海水浴をするといった状況です。

こういった大人の悪い行為が子どもたちにも一と思うと，ほんとうに怪しいことです。

自分のゴミは自分で始末することを大人が実践し，子どもたちにも教えていかないと，それこそ新潟市は不法投棄のまちにもなりかねません。

私の提案

小島ミエさん（主婦 学校町三）

まず町内ぐるみの清掃から

ゴミ箱とすいがらいれを

海水浴場や公園、道路など人の集まるところにはかならずゴミが見られます。そこに住む一市民として悲しくもあり、はずかしいものだと思います。紙クズやタバコのすいがらを気軽にポイ、ポイ捨てる―私にはとても考えられないことです。

いま新潟市では、不法投棄の問題が興っているそうですが、こういった無神経さが引き起すのではないでしょうか。不法投棄を取り締るのも結構ですがそれ以前に町を愛するムードを盛り上げてほしいものです。

町内ぐるみの清掃からスタートし、全市一斉の運動にまで発展すれば不法投棄など興るはずがありません。

それから、市や商店街の人たちに望むのですが、人の集まるところに必ずゴミ箱やすいがらいれを設けてください。捨てるにも捨てるところがなければ汚されるのもやむをえないのでは……。

私たち一人一人の良識で、いっこくも早くゴミのない住み良い新潟市にしたいものです。

鈴木伝二さん（商店経営 河渡）

自分のあき地は自分で守る

私は自分の家から二キロメートルほど離れたところにあき地を持っていますが、管理も悪かったせいか、三か月ほど前ひと山の農作物が捨てられました。それからというもの、日増しにゴミの量は増加しわずか二か月間で五十トン以上にもふくれ上がり、もはや私個人の力ではどうにもならなくなってしまいました。

むろん朝晩見張りをするのですが、そんな時は決まって誰も現われません。というのは、不法投棄の大半が夜やられるからです。

投棄されたゴミの多くは建築廃材で、大型ダンプでもなければとても運べないコンクリートのゴロタなども少なくありません。

「憎むべき不法投棄」の撲滅は絶対必要ですが、その前に自分の土地は自分で守るという自衛手段を忘れていたようです。

市の指導、協力で不法投棄物を整理できましたが、その後有刺鉄線の囲いをしただけでひとかけらのゴミも捨てられなくなりました。不法投棄はあき地などにされるのではなく心のスキ間にされるのではないでしょうか。

憩いの場をきれいに

夏の海辺で

今は、海水浴シーズンのまっさかり。家族そろっての海水浴から若いカップルまで、幸福そうで、ほほえましい雰囲気が、海辺にはあふれています。あるいは、子ども会やサークルのメンバーでやって来てスイカ割りなどのゲームを楽しむ姿もいいものです。

しかし、こうした楽しいひとときを大なしにするのが、足の踏み場もなくなりそうな大量のゴミ。ひと泳ぎして、軽く疲れたからだを浜辺の熱砂の上に休めるのは海水浴ならではの快感ですが、ゴミの中に寝ころぶのでは、幻滅。

夏の浜辺は、海水浴をするところ。ゴミ捨て場ではありません。

公園で

噴水の描く放物線が、ほのかに香る緑の中に白く浮き上がり、恋人たちは愛を語り合う。買い物カゴをぶらさげた主婦たちが、世間話に花咲かせ学生は一人で本を読む。

ところが、彼らの足もとでは、紙くずが風に舞い、タバコの吸いがらは投げほうだい――これじゃ絵になりません。

みんなの憩いの場はきれいに。

「市の積極的な姿勢を」「市民意識の高揚を」

～モニター座談会から～

市は「不法投棄をなくそう」―をテーマに、去る四日、市政モニターによる不法投棄の現場視察と座談会を開きました。以下その内容を紹介します。

◇　◇

現場視察地は、もっともゴミの出し具合いの悪い礎町一丁目と、もっとも整頓された金衛町二丁目の各ステーション、さらに、五十嵐一の丁の県道新潟―間瀬線わきの三カ所。

礎町一は、町内の役員の方々の努力も空しく、整理したあとから、コンクリートや耐久消費財が、あたりかまわず〝わがもの顔〟。町内以外の不心得者もあとを断たないとのこと。

これにひきかえ、金衛町二は、大きなポリバケツをいくつか用意し、その中にゴミを入れるので、ゴミが道路上に露出することなく、衛生的で、美観をそこなうこともありません。

一方、五十嵐地内の不法投棄現場は、長さ五十メートル、幅六メートルにおよんで、建築廃材や車のタイヤ、ビニールなどが投棄され、道路にまではみ出している仕末。

◇　◇

座談会では活発な意見が交わされました。

述べられた意見を大別すると不法投棄に対する〝市の姿勢〟と〝市民の意識〟の二つになるようです。

〝市の姿勢〟に対しては「町内会にまかせっきりにしているのではないか」「監視体制を制度化すべきだ」「現に不法投棄されているゴミを、市が逐次撤去するなりの方策を実施すべきだ」「国・県有地に対しては、国・県に要望すべきだ」―などきびしい意見。

一方、〝市民の意識〟に対しては、「優良モデルケースは、表彰して広く市民に知らせ、悪いケースは『悪い』というレッテルをはったら」―というきびしいものから、「全町内で一斉に整理し、それを契機に市民の意識高揚を図ったら」―などの意見が出されました。

◇　◇

山田慎一清掃部長　「いずれも具体的なご意見で、たいへん参考になりました。市としても手をこまねいていられない段階なので、早速対策の中に組み入れていきたい。」

出席者

石田みつ子（附船町1）
小川登志子（松浜町）
小熊雅宏（東湊町1）
小原力（五十嵐1）
風間日出子（寺尾）
河内弘（日ノ出2）
木島千里（五十嵐1）
小林正（幸西）
斉藤睦栄（鳥屋野）
桜井ヨシ（臨港1）
佐藤夷希子（青山）
真保雅敏（青山）
田中ハル（下旭町）
中村千江（五十嵐3）
生野一司（流作場）
星野喜作（関屋大川前）
森繁樹（和田）
山田伊四郎（姥ケ山）
山本恵子（五十嵐中島）

市側　山田慎一清掃部長ほか